

——9月の中国での反日デモをどう見ましたか。

「世界各地の紛争地で見たくを思い出した。暴動を起こす人々は、最初はためらっていても、人数が増え、いったん破壊行為が始まると行動が過激になり止まらなくなる。今回の中国の場合、騒乱が途中でピタリとやんだ。それが可能な仕組みがある国にはあるのかなと感じた」

——危険地域と呼ばれる場所を含め、海外での勤務経験が豊富ですね。

「1980年代後半にアフガニスタンからの難民支援のためパキスタンのペシャワールで勤務し、時々アフガンの首都カブールなども訪れた。同僚が武装組織に殺害されたり、宿舎の近くに砲弾が撃ち込まれたりした。自分の車の前を走っていた別の車が爆破されたこともある。90年代の世界保健機関(WHO)の緊

急支援課長時代には、内戦下のスーダンなどにも入った。危険な所で仕事をする経験をしたくさんいただいた」

「ペシャワール時代は、情勢が悪化した場合にはすぐ脱出できる準備を常にしていた。枕元には非常持ち出し品を詰めたナップザックを置

き、自宅の車は予備のタンクも含めてガソリンを満タンにしていた。旅客機の手ケットを買えるだけの現金もいつも用意していた」

——海外で日本人が巻き込まれる事件や災害が続発して

います。危機に対処するうえでの心構えは。「心配性であることだ。危険な経験はしなやかに越したことはない。ただ、危険を避け、起きた危機から迅速に脱出するには、ある種の敏感さが必

要だ。動物的な感性と言ってもいい。平和な時代が長く続いた結果、今の日本人はそうした感性が鈍くなり、あまりに無防備になっている。海外では『事態は自分の願う方向にはいかないかも』と考える、ある種のネガ

心配癖つけ、判断は自分で

ティブ思考が必要だ。ただ、今の日本人は

逆で善意と楽観的見方でものを考えてしまいがちだ」

「こちらが用心していることを周囲に示すことも大切だ。大学の学生たちを毎年、東南アジアや南アジアなどに研修に連れて行っている。現地では学生たちに『人前で無防備に財布を開けたり、自分の住所などを知らなかった現地の人間に不用意に教えるな』と厳しく指導している」

「一方で、たとえば危険な状況であっても、そこに行くことが任務であれば行かねばならない職業もある。それでも、一般人が単なる好奇心で危険な所に行くのは反対だ。特に、危険な感染症が流行している地域であればなおさらだ」

——異変を察知するには。「96年にペルーで日本大使公邸人質事件が起き、日本政府が急きよ秘密裏に派遣した医療チームの一員として現地入りした。そして、治安部隊の突入など動きがある際には、大量の負傷者発生を見越して現地の病院の中の人々の流れが変わるなど、さまざまな兆候があることを知った。現地の様子を注意深く見ていると、必ず何か兆しがある」

「海外の空港や駅では、たとえ現地の言葉がわからなくても、必ず地元の新聞を買うようにしている。一面にテロ事件の現場の写真などがあれば、それだけでその地域がそうした事件の起きる状態にあるとわかる」

——日本人が危険に対する感性を磨くには。「自分自身にシミュレーションを課してみるという方法がある。たとえば、今ここで突然、武装組織がテロ攻撃を仕掛けてきたらどう逃げるか、といった想定をあえて自らに突きつけ、対処策を考えるクセをつけることだ」

「今の日本では何か緊急事態が起きると、とかく『行政は何をしていいか』といった方向に矛先が向くが、大切なのは個人がどう危機に向き合っただ。判断を他人任せにせず、自分で決めることだ」

日本赤十字九州国際看護大学学長 喜多悦子氏



きた・えつこ 医学博士。紛争地などでの難民支援に長く従事。05年より現職。米ジョージ・ワシントン大学国際看護学部長。73歳。